

## 小さな命

奈良市立二名中学校 1年 鈴木 泰葉

毎年夏になると、うちの庭の金柑の木に、アゲハチョウが卵を産んでいく。気をつけて、じっと目をこらさないとわからないほどの小さな黄色い卵が、あちこちの葉のうらに産みつけられている。卵が黒く変色したら、幼虫が生まれるサインだ。じきに、真っ黒な幼虫が顔を出し、旺盛な食欲で葉を切り取りながら、もぞもぞと動き出す。小さい体からは想像できないほどのたくましさで、スピーディーに葉から葉へ食べ進んでいく。

私は、いつも幼虫が生まれるとすぐ、金柑のやわらかそうな葉を選んで枝先を切り、水を入れたコップにさして枯れにくいようにし、幼虫のついた葉と一緒に虫かごに入れる。注意深く作業を終えたら、ここから私のアゲハチョウの幼虫の飼育が始まる。幼虫の飼育は、小学2年生の時から毎年行っている私の年中行事だ。

なぜ飼育をするようになったか。それは小学2年生の時に衝撃的な場面を見たからだ。その年の初夏、金柑の木にはたくさんのアゲハチョウの幼虫がいた。黒一色の小さくて生まれて間もない幼虫も、大きくなって鮮やかな黄緑色の青虫もいて、金柑の木全体がにぎやかで楽しい感じだった。幼虫が盛んに葉を食べる様子が可愛くて、私は時間を忘れてじっと見たり、家にも気になって何度も何度も庭に出て、幼虫のもとに通ったりしていた。そんなある日、鳥がすべての幼虫をひとつ残らず食べてしまったのだ。私はとても悲しくて、幼虫たちがかわいそうでしかたがなかった。それで、その時以来、幼虫が無事にアゲハチョウになれるように、幼虫を見つけたらすぐ家に持ち帰り、飼育することにしたのだ。

自然の世界は厳しい。アゲハチョウになってからも、危険はいっぱいだ。食物連鎖上、いつも狙われていることは言うまでもなく、荒れた天候で命を落とすかもしれない。それでも、せめて幼虫から成虫になる短い間だけでも、平和に生きる手伝いをしたい。そう思って、毎年世話をしている。食べられてしまった幼虫たちの分もしっかり生きてね、と願いを込めながら。

幼虫を育てているうちに、実際に見たり、本で調べたりして学んだことが、たくさんある。幼虫の体は鳥のフンに見える色になっていることやアゲハチョウの種類によって幼虫の角の色が違うことなどだ。

毎年、夏の終わり頃になると、さなぎの背中が割れ、きれいなアゲハチョウになる。虫かごのふたをあけて、育てたチョウが外の世界へ舞い立っていくのを見るといつも、「育てて良かった。無事に育ってくれてありがとう。」と思う。庭や近所でアゲハチョウが飛んでいるのを見ると、「育てたチョウかな。」と考えたりして、温かい気持ちになる。

しかし、今年は飼育していた幼虫が死んでしまった。ずっと飼育してきて、初めてのことで。その幼虫は一週間ほど前に見つけて、世話をしていたものだった。朝、いつものようにフンのついた虫かごをそうじして、えさとなる葉のついている枝を切り、コップの水を換え、幼虫が気持ちいいように虫かごの中を整えた。その後、たまにはと思いつき、日光浴のために外に虫かごを置いていたら、暑すぎてひからびてしまったのだ。「幼虫のために。幼虫が喜ぶだろう。」と思ってした行動が原因で、小さな命を奪ってしまったのだと考えると、たまらなく悲しかった。朝まで元気に動いていた幼虫が命を失い、ただの物体となって、力なく虫かごの底にころがっているのを見て、辛さと申し訳なさで寂しさで胸がいっぱいになって、涙が出た。

私は幼虫を土の中に埋めた。そして、埋めている時にふと、「蚊を殺しても悲しいとは思わないのに、アゲハチョウの幼虫だとどうしてこんなに悲しいのだろう。」と思い、考えてみた。ペットが死ぬと、とても悲しい。でも、ムカデやハエが死んでも悲しくない。愛情をたっぷりかけて一緒に生活してきたペットとどちらかという嫌われものといった存在の害虫では、比べること自体無理があるかもしれない。でも、本当にそうだろうか。害虫という決めつけだって、もともと人間の尺度でみたネーミングだ。小学校でナナツボシテントウムシは益虫で、ニジュウボシテントウムシやフタツボシテントウムシは害虫と習ったことがあったが、どれもテントウムシで一生懸命生きていることにはかわりはないはずだ。見た目の良し悪しや自分にとって害があるかどうかということで、一つ一つの命の重さに差があるのはおかしい。一つ一つの命は大切なもの。形が小さくても大きくても。数が少なくても多くても。その特徴が受け入れやすくても受け入れがたくても。みんな一生懸命生きている。

生物一般について考えてそう思ったが、もっと狭く人間の世界で考えてみても同じことが言えるのではないだろうか。一人一人一生懸命生きている。その命の大切さは人種や貧富で変わるものではないはずだ。

このように考えるようになってから、私の行動は少しずつ変わってきている。家の中に入ってきた小さなクモでさえ、つぶすのではなく、紙ですくって外に逃がしたり、踏みそうになったアリをよけたりするようになった。小さな命でも大切にしたいと思う。人に対しても、自分と同じ大事な命、大切な存在だということを忘れずに接していきたいと思っている。

たくさんのことを考えさせられた幼虫の死だった。感じたこと、考えたことをこれからしっかり実行していくことが幼虫の死を無駄にしないことになると思う。

来年また夏が来たら、その時は今年の失敗を活かして幼虫を育て、立派なアゲハチョウを飛び立たせたい。